

2025 年 8 月 31 日（日）「懲らしめに甘んじよ ～エリファズの第一回弁論（後半）～」

ヨブ記 5:1-27

- 1 呼んでみてほしい。あなたに答える者がいるだろうか。あなたは聖なる者たちの誰に向かおうとするのか。
- 2 憤りは無知な者を殺し、妬みは思慮なき者を死に至らせる。
- 3 私は無知な者が根を張るのを見、その住みかを直ちに呪った。
- 4 その子らは救いから遠ざけられ、町の門で碎かれても、助ける者はいない。
- 5 その収穫物を飢えた者が食べ、茨の中から得たものを奪い取り、渴いた者は彼らの富をあえぎ求める。
- 6 不義は塵からは出て来ず、労苦は大地からは生じない。
- 7 人は苦しむために生まれ、火の粉は高く舞い上がる。
- 8 しかし、私は神に尋ね求め、私のことを神に委ねる。
- 9 この方は偉大なことをなされ、究め難く、その驚くべき業は数えきれない。
- 10 地の面に雨を降らせ、野の面に水を送る。
- 11 低い者を高く上げ、嘆く者を引き上げて救う。
- 12 悪賢い人々の企てを打ち碎き、彼らの手はその考えを実現できない。
- 13 知恵ある者を彼ら自身の悪だくみによって捕らえ、曲がった者のたくらみは破綻する。
- 14 彼らは昼も闇に出会い、真昼にも夜のように手探りする。
- 15 神は貧しい人を彼らの剣の刃から、強い者の手から救い出す。
- 16 それゆえ弱い人にも希望があり、不正はその口を閉ざす。
- 17 神から懲らしめを受ける人は幸いである。全能者の訓しを退けてはならない。
- 18 神は傷つけても、また包み、打っても、その手で癒やしてくださる。
- 19 六度苦難が襲っても、神はあなたを救い、七度襲っても、災いがあなたを打つことはない。
- 20 飢饉の時には、あなたを死から救い出し、戦いの時にも、剣から救い出す。
- 21 舌の鞭からあなたは隠され、滅びが来ても、あなたはそれを恐れない。
- 22 滅びと飢饉をあなたは笑い、地の獣を恐れない。
- 23 野の石とあなたは契約を結び、野の獣はあなたと平和に暮らすからである。
- 24 あなたは自分の天幕が平和であることを知り、牧場を見回っても、あなたに欠けているものはない。
- 25 あなたの子孫は多くなり、あなたの裔が地の青草のようになるのを知る。
- 26 あなたは生涯を全うして墓に入る。あたかも麦の束がふさわしい時に収められるように。
- 27 見よ、これが私たちの究めたところ。これを聞いて、あなた自身も知るがよい。

【序論】

エリファズの第一回弁論が続きます（しつこい）。彼の基本的な考え方が4章と何か変わっているわけではありません。むしろ、苦難の中にあるヨブを更に追い詰めることにおいて、罪を積み重ねていると言ったほうがよいでしょう。

ヨブ記の著者は、ヨブと三人の友人との気の遠くなるような討論を通して、読者に何かを訴えかけています。それは、ほとんどの人間が知らずに行なっているコミュニケーションの取り方——相手の心を聴くことなく、自分の主張を押し付ける傾向——によって、相手は「理解してもらえなかった」「裁かれた」という疎外感ややり場のない気持ちを味わい、精神的な孤独へと追いやられるという状態です。ヨブ記に見られる「友人間」のコミュニケーションは、その典型的な例を描いています。そして厄介なのが、「友人」のことばの中には真理が含まれているということです。ヨブにとっては別次元の「真理」が呈示されるのですが、彼自身が置かれている現実や心に抱いている疑問とかけ離れているため、両者は完全に平行線を辿ることになるのです。こういったことが、現代に生きる私たちの間でも起きていないだろうか。ヨブ記はそのような問題提起を投げかけています。

【本論】

本論 1. 不敬虔な者の扱い（1～7 節）

呼んでみてほしい。あなたに答える者がいるだろうか。あなたは聖なる者たちの誰に向かおうとするのか。（5:1）

エリファズが言っていることを分かりやすく変換してみましょう。「お前が誰かを呼んでも誰も応えてはくれない。『聖なる者』（神の使い）とて同じこと。誰かに頼るのではなく、率直に神の懲らしめを受け留め、悔い改めよ。」

憤りは無知な者を殺し、妬みは思慮なき者を死に至らせる。私は無知な者が根を張るのを見、その住みかを直ちに呪った。その子らは救いから遠ざけられ、町の門で碎かれても、助ける者はいない。その収穫物を飢えた者が食べ、茨の中から得たものを奪い取り、渴いた者は彼らの富をあえぎ求める。（5:2-5）

ここで繰り返される「無知な者」「思慮なき者」とは、ヨブを指しています。自分の生まれた日を軽んじたヨブのことばを「憤り」「妬み」から出たものと捉え、神への不敬虔と見なしたのです（ヨブは神を呪うことを避けていた）。エリファズは「私は無知な者が根を張るのを見、その住みかを直ちに呪った」と言っていますが、これは自分が神の代理としてヨブの繁栄を呪ったという意味でしょう。「その子らは救いから遠ざけられ、町の門で碎かれても、助ける者はいない」とは、ヨブの10人の子どもたちが大風で家の下敷きになったことを表していると思われます。そして、「飢えた者」「渴いた者」——すなわち略奪隊——がヨブの資産をことごとく奪い去って行ったと。

ここまで聞いて、エリファズが苦しみの中にあるヨブに対してどれほどひどいことを言っているかが分かるでしょう。慰めのかけらもありません。

不義は塵からは出て来ず、労苦は大地からは生じない人は苦しむために生まれ、火の粉は高く舞い上がる。(5:6-7)

この箇所を言い換えると、「火のないところに煙は立たぬ」ということ。ヨブは何か悪いことを行なったために人生の苦難が降りかかったのだと。「火の粉」と訳されたことばは文字通りには「レシェフの子ら」。レシェフとはカナン神話に出てくる破壊神で、火と稲妻と疫病をもって災いをもたらすと言われます。ヨブに降りかかった災いのイメージと重ねているのでしょう。

本論 2. 神とはどういうお方か (8～16 節)

しかし、私は神に尋ね求め、私のことを神に委ねる。(5:8)

このように言うことで、エリファズはヨブのあり方を暗に非難しています。ヨブは（実際にはしていませんが）「聖なる者」の仲立ちを求めたが、自分はそういうことはせず「**神に尋ね求め**」「**神に委ねる**」と。ヨブの呻き・呟きを受けて、自分の敬虔さを誇っているかのようです。以下に続いていく神の性質の羅列は真理も多く含まれているため、読者は煙に巻かれたようになってしまいます。一つずつ評価してみましょう。

この方は偉大なことをなされ、究め難く、その驚くべき業は数えきれない。(5:9)

詩編を含む知恵文学によく出てくる表現（例：詩編 154:3）。

地の面に雨を降らせ、野の面に水を送る。(5:10)

他多くの聖書記事と一致（例：詩編 104:13）。

低い者を高く上げ、嘆く者を引き上げて救う。(5:11)

ハンナの祈りやマリアの讃歌などにも共通の概念がある（I サムエル 2:7、ルカ 1:52）。

悪賢い人々の企てを打ち砕き、彼らの手はその考えを実現できない。(5:12)

これもまた聖書の随所で語られている真理（例：詩編 33:10）。

知恵ある者を彼ら自身の悪だくみによって捕らえ、曲がった者のたくらみは破綻する。(5:13)

パウロが本節の前半を引用している（I コリント 3:19）。

彼らは昼も闇に出会い、真昼にも夜のように手探りする。(5:14)

同様の表現が申命記にも出てくる（申命 28:19）。

神は貧しい人を彼らの剣の刃から、強い者の手から救い出す。(5:15)

参考箇所多数（例：詩編 35:10、72:4）。

それゆえ弱い人にも希望があり、不正はその口を閉ざす。(5:16)

よく似た表現が他の箇所にも見られる（例：詩編 107:42）。

以上のように見る限りにおいて、エリファズが言っていることに間違いはないように感

じます。では、何が問題なのか。第一に、彼が呈示する神観はヨブがとうに認識していることであるということ。第二に、エリファズがこれらの神観を呈示するとき、「悪賢い人々」「曲がった者」をヨブに当てはめ、ヨブの「悪だくみ」「たくらみ」が打ち砕かれ、「貧しい人」「弱い人」が「悪しきヨブの手」から救われたと解釈していることです。こんなことを言われて黙っていられるヨブではないでしょう。エリファズは聖句を引用する文脈を間違えているのです。

本論 3. 神の懲らしめに甘んじよ (17～27 節)

神から懲らしめを受ける人は幸いである。全能者の訓しを退けてはならない。神は傷つけても、また包み、打っても、その手で癒やしてくださる。六度苦難が襲っても、神はあなたを救い、七度襲っても、災いがあなたを打つことはない。(5:17-19)

エリファズがヨブの苦しみを「全能者の訓し」と理解しているところに、そもそもの認識のズレがあるように思えます。彼は、苦難とは罪人を矯正するために神からもたらされると考えている。しかし、本書で前提として語られているように、ヨブは神ご自身が認めるほど敬虔な生き方を貫いていたことを見落としてはなりません(1:8)。

エリファズは滔々と語り続けます。神は一時的に懲らしめた後、癒しを与える方であると。「六度…七度」という詩的な表現が余計にヨブの神経にさわる。

飢饉の時には、あなたを死から救い出し、戦いの時にも、剣から救い出す。舌の鞭からあなたは隠され、滅びが来ても、あなたはそれを恐れない。滅びと飢饉をあなたは笑い、地の獣を恐れない。野の石とあなたは契約を結び、野の獣はあなたと平和に暮らすからである。あなたは自分の天幕が平和であることを知り、牧場を見回っても、あなたに欠けているものはない。あなたの子孫は多くなり、あなたの裔が地の青草のようになるのを知る。あなたは生涯を全うして墓に入る。あたかも麦の束がふさわしい時に収められるように。(5:20-26)

ここでは、飢饉、戦争、略奪者、野獣からの守りと、豊作、子沢山、長寿が与えられると言われています。この内容は、申命 28:1-14 の中にも見られる神の祝福と重なることが多い。少し独特な表現として「野の石とあなたは契約を結び」とありますが、これは耕作の障害となる石が出なくなることを表しているでしょう。

いずれにせよ、「これからこのようにあなたの人生は好転するだろう」と言われても、これもまた実はヨブの現状に何も寄り添ってはいないのです。私たち人間は、辛いこと、苦しいこと、悲しいこと、悔しいこと、困っていること……があつて、それを誰かに聞いてもらいたいと思っていることがあるでしょう。そのときに、ありがちな応答として、「そんなに悩むことはないよ」「苦しいことは誰でも経験するよ」「すぐに状況は良くなるよ」「世の中にはもっと大変な人もいるんだよ」など、多くの人がごく当たり前に言っていることが、実はその人の心の声を何も聞いていない可能性がある。当事者は意見や評価の前に、まず自分のそのまの思いを受け止めてもらいたいのです。しかし、そのような「聴き方」は生まれつきの人間には基本的に備わっていません。

見よ、これが私たちの究めたところ。これを聞いて、あなた自身も知るがよい。(5:27)

心身ともに打ち砕かれた状態のヨブにとって、これは自分に対する三人の友人(私たち)からの嘲りにしか聞こえなかったことでしょう。エリファズの目的はヨブに神学的な慰めと助言を与えることでしたが、その代わりに彼は偽りの告発でもってヨブを更に傷つけてしまったのです。

【展開】

私自身、「心の聴き方」というものを初めて学んだのは大学に入ってからでした。特別講義をしてくださったカウンセラーの先生からそれを学んだとき、それまでに自分が人と取ってきたコミュニケーションとはかけ離れていることを感じました。そして、肯定でもなく、否定でもなく、意見を言うのでもなく、ただ傾聴することの難しさを知ったものです。これはテクニックとして学ぶだけでなく、語り手に寄り添う心、愛と思いやりがなければできない「聴き方」であります。そして、そのようなコミュニケーションは多くの人間関係を修復していく鍵となるでしょう。ヨブ記は、「聞かない」で「意見を言う」スタイルのコミュニケーションがもたらす心のすれ違いを逆説的に教えている、古の名作なのです。

【結論】

私たちは、ときにヨブのように、言葉にならない痛みの中で、ただ誰かに聞いてほしいと思っています。エリファズはヨブの声を聴けませんでした。しかし、主イエスは聖霊によって、私たちの呻き、涙、疑問を、すべてご存知であるということを思い起こしたい。

霊もまた同じように、弱い私たちを助けてくださいます。私たちはどう祈るべきかを知りませんが、霊自らが、言葉に表せない呻きをもって執り成してくださるからです。(ローマ 8:26)

この方こそ、私たちの真の慰めであり救いです。

【祈り】

慰め主なるイエス・キリストの父なる神様。人間同士のコミュニケーションにおいては、多くの誤解と無理解が伴います。それによって傷つけ、傷つけられている、私たちの人生であるかもしれません。しかし、主イエスは私たちの痛みを知り、私たちの隠れた思いをも汲み取り、常に慰めを与えようとしてくださっています。この方とのコミュニケーションを日々大切にしながら歩んでいきたいと思ひます。私たちも、我が内に宿ってくださっている聖霊の細き御声に耳を傾けつつ歩んでいくことができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
多くの人の痛みを担い、弱き者の心を知っておられる、主イエス・キリストの恵み、
御手の中で慰めを与え、物事の事実と本質とを見極めてくださる、父なる神の愛、
人の心の声に耳を傾け、静かに語りかけておられる、聖霊の親しき交わりが、
この場におられるお一人おひとりの上に、そのご家族と歩みのすべての上に、今も後も、
世々限りなくありますように。